関連学会印象記

5 th International Congress of Cardiac, Thoracic and Vascular Anesthesia (Sep 12-16, 1995, Istanbul, Turkey)に参加して

野村 実*

本会議は以前神戸で開かれており，今回はアメリカの Society of Cardiovascular Anesthesiologists (SCA)，ヨーロッパの European Association of Cardiothoracic Anaesthesiologists (EACTA)，と最近トルコに設立された Turkish Sofiety of Cardiovascular Thoracic Anesthesia and Intensive Care の合同シンポジウムとして行われた．トルコ出身の著明な Prof Tarhan (Mayo Clinic) も学会の開催に御尽力されたと聞いております．

イスタンブールは，ヨーロッパとアジアにまたがるボスフォラス海峡に位置しています．イスタンブール市内や近郊にはオスマントルコ帝国をしのばせる遺跡が残っています．キリスト教徒との交流を物語るように，モスクのなかにキリストの絵がぬり込められていたり，地下に戦争用の貯水槽（地下宮殿）があったり，やはりイスラムの独特な文化があります．同時に，トルコ語をアルファベット表記に変えた近代トルコの父と呼ばれるアタチュルクによる西欧的な国家の息吹も感じられます。狭いイスタンブール市内にはほぼ東京と同じ1300万人の人口があり，朝夕のラッシュは東京以上でびっくりしました．

学会期間は5日間で，講演は基本的にそれぞれの分野の専門の lecture を行うという形で進み，一般演題はポスターによる発表でした．日本からの発表としては，ポスターが4題あり，浜松医科大学の尾藤先生，広島大学の Yamanoue 先生と東京女子医科大学の角田先生，近藤先生が発表され，特に Yamanoue 先生は rat の大動脈を使用した PGI_2およびその誘導体の研究で poster awards を受けられました．ポスターでの発表は，時には厳しい質疑応答もありましたが全体としてはなごやかな雰囲気で行われ，様々な意見の交換がなされました．質疑応答の内容として，心筋保護液に phsphodiesterase III inhibitor を加えたほうが良いとか，normothermia の人工心肺のほうが良いとか，具体的な症例にそった適確なコメントが多くみられました．麻酔科医は心臓手術を全体の quality of assurance としてとらえ，人工心肺の管理方法や心筋保護についての細かな知識を貯え，麻酔科医自身がそれらを研究してコントロールする時代になってきております．

また，new monitoring というセッションで，広島市民病院の多田先生が大量フェンタニルの脳波の変化，私が逆行性脳灌流時の内頚静脈酸素飽和度モニターについての発表をいたしました．lecture は congenital heart disease, nitric oxide, myocardial preservation など15のセッションに分かれ心臓麻酔のほとんどの領域を網羅しておりました．全世界から集まった演者による lecture の質は高く，今までの知識の向上と整理という意味で有意義な学会でした．また，学会中の Gala Dinner では，イスラム色あふれる演出がなされ，学会懇親の場として楽しく過ごせました．

学会を終わってみて感じることは，心臓麻酔の分野では日本は一施設における手術症例数に限りがあり，臨床研究や教育を行うためには多施設での共同が必要ではないかということです．また，この国際学会でもメインのテーマの一つは教育であり，技術取得の場としての，学会の役割が強調されているようです．本年11月にはシンガポールで，北大の劔物教授が学会長になられ第1回アジア心臓麻酔学会が開かれましたが，日本にも心臓麻酔の体系的な土壌がもうすこし広がればよいと願っております．

*東京女子医科大学麻酔科学教室(現コロンビア大学 St Luke's-Roosevelt Hospital Center 麻酔科)

Presented by Medical*Online